岩辻山の酒清水（三田市藍本）

藍本〈あいもと〉の酒滴〈さかたれ〉神社のうら山に、岩辻山〈いわつじやま〉という大きな岩山があります。このそばを通る汽車のまどからもよく見えます。
むかし、この岩辻山の大岩の間から酒清水〈さかしみず〉が湧〈わ〉いていました。
この酒清水を壺〈つぼ〉にいれてもってかえり、病人にのますといっぺんに病気がなおったということです。
今から七百年ほどむかしのことでありますが、日本国中に疫病〈えきびょう〉がはやって、時の天皇〈てんのう〉も将軍〈しょうぐん〉もみなこの病気になやまされました。
ある夜、天皇の枕もとに一人の子供があらわれて、天皇に告〈つ〉げました。

「私は摂津〈せっつ〉の国藍本〈あいもと〉の庄〈しょう〉に住〈す〉むものである。私の村に岩辻山といって酒の清水がわいている山があり、この酒清水を病気の人びとにのませたら、病気はその場で治〈なお〉るであろう。」
と、いったかと思うと子供のすがたは見えなくなりました。
天皇は、非常に不思議〈ふしぎ〉に思われて使者を藍本へつかわされました。その使者が藍本の近くまで来〈く〉ると、どこからか一人の白髪〈はくはつ〉の老人〈ろうじん〉があらわれて、言葉をかけました。
「見たところ立派な身分の高い方と思うが、何をしょうとここに来られたか。」
天皇の使者はそのわけを詳〈くわ〉しく話すと、
「その酒清水のわいているのはあの山だ。」
と、いって西の方に高くそびえている山を指して教えました。そして、先に立って道案内をしました。
天皇の使者は、その白髪の老人のあとについて山をのぼってゆくと、ぷんぷんと酒の香のする清水がわいていました。白髪の老人はどこへ行ったか、すがたが見えなくなりました。
使者は、その酒清水をいくつもの壺〈つぼ〉にいれて都にもって帰りました。
天皇も将軍もこの酒清水をのみ、すべての役人にものませ、残りはすべて都中の病気になやんでいる人びとにわけあたえました。
さしもの悪い病気も、一、二か月で治ったのは、みなこの岩辻山の酒清水のおかげでした。
このようにして、岩辻山の酒清水はありがたい酒清水だといって、諸国から壺をさげてもらいに来る人がたくさんありました。
ある人は、ほとんど息〈いき〉が絶〈た〉えようとしている時に、三口〈みくち〉この酒清水をのませていきをふきかえしたといわれ、ある女の人は、この酒清水をいただいて、まるまるとした男の子を産んだといいつたえられました。
酒滴〈さかたれ〉神社のうしろに池があって、岩辻山の清水の流れてくる谷すじがあります。このあたりに行くと今でも、水の色も少し黄色いようで酒の匂いがするようであります。